

(1984年)
昭和59年5月号 グリーン・エージ
緑ゆたかな環境をつくろう。

原っぱ公園の提案

二宮 康明

(前電電公社研究本部調査役・工博)



これからの市民生活では、労働時間の短縮や、休日の増加によって、青年から壮年層のサラリーマンは、ごろ寝ばかりをきめ込むわけに行かず、ますますレジャー指向が進むものと思われる。また中年以上の高齢人口の増加につれて、生きがいを見出すことのできる余暇の過ごしかたが重要な社会問題になりつつある。さらに幼少年はテレビや室内ゲームばかりに熱中していると、よい結果にはならないという反省があって、戸外での遊びが大いに奨励される傾向にある。

このように今後、老幼を問わずすべての年齢層において余暇の有意義な過ごしかたが求められる結果、レジャー人口が増加すると同時に、多様化の世相を反映して個人ごとの好みの違いによってレジャーの種類もますます多岐にわたるものと予想される。すなわち碁、将棋、つり、野球、ゴルフ、テレビなどといった定形的なレジャーから、さらにバラエティに富んだ、例えば凧揚げ、模型飛行機、フリスビー、草の上のジョギングなどといった個人の好みに応じて、レジャーの種類、方法を選んで楽しむという方向に変りつつあるよう見受けられる。

このようにバラエティに富んだ野外レジャーのための施設としては、今までのような池や樹木を中心とした「眺めるための」公園（以下「眺望公園」と呼ぶことにする）や、スポーツのためのいわゆる運動公園だけでは、とてもニーズを十分満足せるとは思われない。すなわち、眺望公園の主体

は池、樹木であり、この間の定められた小径を通り、また定められたベンチに腰かけて風景を眺めるという風に、すべてが、あらかじめ設計された通りにしか利用が出来ない。また運動公園もこの点では同様であって、市民が利用する場合の実情は、限られた種類のスポーツで、何等かの団体あるいは組織に入っていないと利用できない面が多い。例えば、野球のグラウンドはスパイクで走りまわるのに、野球以外の目的でズック靴で入っても追い出される。テニスコートはもちろん、あれほど広いゴルフ場でも、遊びに入るわけにはいかない。結局、定形的なレジャー以外に銘々勝手な楽しみ方のできる場所が少なすぎるのである。

むかしをふりかえって考えてみると、街の近くには、自由に凧揚げしたり、走りまわれる原っぱがあり、その一方で池や樹木のある眺望公園があった。市民は時に応じて、その両方をうまく使いわけることができたが、現在では原っぱは姿を消して、その自由度は失なわれてしまった。

従来の眺望公園や運動公園を洋間に例えることもできるような気がする。洋風建築では、ダイニングルーム、リビングルーム、ベッドルームなどと、用途がはっきり決っている。しかも日本の住宅事情では、狭いところをさらに仕切るものだから、小間切れになって、とにかく使いにくい。一方日本間では、畳敷の場所を使い方によって、食堂、寝室、居間など自由に変化させることができ

る。現在の都市空間の市民生活の場に、この日本間の自由さに匹敵するスペースが欠けているのではないかろうか。このスペースがすなわち「原っぱ」ではないだろうか。

このように、今後の都市には利用方法が限定された従来の眺望公園や運動公園だけではなく、利用自由度の大きい「原っぱ公園」も必要なのである。勿論、現在の眺望公園の中にも原っぱの部分は存在する。しかし外国のように広大な公園敷地のとれない我が国では、1つの公園内にいろいろな施設を設けることは、箱庭のようにおののの規模が小さくなつて、十分な機能をもたせるには無理が生ずる。電車、バス等で30分～1時間の利用圏内に複数個の公園がある場合には、各公園に性格づけをして、それぞれに機能を分担させるのが適當ではなかろうか。

都会に住む多くの市民は、時には戸外に出て太陽の下でのびのびと爽快な気分を味わいたいと希望している。大人と子供とでは地面から眼までの高さが違うので感じ方に差はあるが、のびのびと感ずるには半径100～150米、すなわち300米四方ぐらいの広さが欲しいところである。例えば、凧を小さく見えるまで高く揚げたり、模型飛行機を“飛んだなあ”という、満足のゆくまで飛ばしたり、あるいは子供が自転車で自由に走りまわったり、お互にぶつかることなく、安全に自由に活動できるのが大体上に述べた広さである。

土地が狭く、地価の高い日本の都市内でこれだけの面積を確保することは一般的には不可能に近く、「原っぱ公園」など絵空ごとのように思われるかも知れないが、しかし方法がないわけではない。幸にして最近は都市の中心部に近い場所でも、学校や工場の移転などで、広い空き地が出来ることも稀ではない。今までこののような空き地はすぐ何かの建物などの建設予定地にされてしまつて、原っぱとしては利用できなかつた。私は、このような空き地の利用法として、小中学生が放課後に利用できるくらい市街地に近いところに、是非

「原っぱ公園」を実現させこれを都市の総合開発計画の中に組み入れた形で確保してほしいと願うものである。こうしたスペースは、単に市民のレジャーのためばかりでなく、非常災害時にはヘリコプターなどによる救難基地としても大いに利用が期待できる。

具体的な例として、東京都武藏野市にある武藏野中央公園予定地について御紹介しよう。ここはグリーンパーク米軍宿舎（終戦までは中島飛行機工場）の建物をとりはらった跡地で、現在すでに都が買い上げて（一部国有地）、都立公園予定地となっている。その中央部は全面原っぱで、前述の「原っぱ公園」に望ましい面積の約300米四方に近い面積がある（残念ながらその1/3ほどには野球場の工事が始められ、原っぱの部分は狭くなっている）。将来ここに都立公園が建設される予定であるが、その際従来の公園のように池を作るなどして、眺望公園にしてしまうのはまことに惜しい。それは武藏野地域に既存する井の頭公園や善福寺公園と同種のものの数が増すだけで、質的な変化は期待できない。また運動公園とした場合には限られた市民にしか利用されない結果になる。何とかここに「原っぱ公園」を実現してもらいたいものである。

現実にいま上述の公園予定地は暫定的に一般市民に開放されており、通称グリーンパークと呼ばれている。私たちはこの広場で昭和53年から毎月1回紙飛行機を飛ばす会を開いているが、参加者



子供たちの夢をひろげる原っぱ広場

の中には家族連れも多く、武藏野、三鷹を中心とした田無、保谷、小金井などの近隣地域および東京23区ばかりでなく、少數ではあるが遠く神奈川、埼玉、千葉などから訪れる人もある。一日中楽しんで、これら他県の人々は、この広場の広々とした状況をうらやましがって帰るという風である。原っぱ願望は決して私の我田引水ではなく、首都圏など都会に住む市民の切なる希望である。

上述のようなグリーンパークの原っぱを利用してきた経験から、私が感じたことのいくつかをもう少し御紹介しよう。

この原っぱが市民に開放された当時、遊びに来た子供たちは原っぱのまん中に出て遊ぼうとせずに、周囲の金網の近くにたむろしていた。可愛そうにも丁度狭い所に棲むのになれたゴキブリのようであった。しかし5年ほど経った今では、原っぱじゅうを走りまわっている。また原っぱというと第一に子供達や家族連れで遊ぶ姿を想い浮かべるが、そればかりでなく原っぱは、高齢の人々にとっても健康と生きがいの場所なのである。朝は早くからラジオ体操や詩吟の会が行われる。紙飛



原っぱ広場はさまざまな利用が可能である

行機を飛ばす会には、幼稚園児から70歳を越す年輩の方々まで多数参加されるが、年輩のかたが小学生に作り方、飛ばし方を教えて、その深い知識とすぐれた技術で幼ない人々から尊敬のまなざしで見られているほほえましい風景も稀ではない。

昨今、病院の待合室は老人のサロン化していると言われるが、高齢化の進む中で、元気な高齢者も増加しており、これらの方々に生きがいの場を用意することも、行政当局には真けんに考えてもらいたい。

ちなみに、眺望公園の場合は、池、樹木が主体であり、これらを眺める利用者の我々は、言わば従の受身の立場にならざるを得ない。一方「原っぱ公園」では凧を揚げたり、虫を追いかける市民各自が主役になれるのである。日頃、会社、学校、塾など四六時中、何等かのきびしい管理下におかれ、また急速にコンクリート化、過密化の進む環境下に生活せざるを得ない多くの市民にとって、原っぱでの自由な自然の遊びは、ささやかではあるが原始感覚をとりもどして、精神的な豊かさを回復してくれる手段となろう。

またグリーンパークの原っぱを利用していて気がついたもう一つのこととは、雑草による地面の被覆力が非常に強いということである。造園の専門家から見れば当然のことかも知れないが、雑草のおかげで12~3月の霜柱の季節にも原っぱはドロドロになることも無く、完全に一年を通じて利用できる。そこで造園関係の方々にお願いしたいことは、将来この種の公園が計画される場合のために、我が国の風土に適した年中を通じて原っぱを利用可能とする、維持費の安い被覆用植物の研究をおねがいしたい。あるいはいま進歩しつつあるバイオ・テクノロジーで、将来実現できるのではないかという気もする。

「原っぱ公園」の施設としては、公園敷地の主要部分を踏みつけに強い、広々とした草地とし、これに水飲み場、トイレなど若干の設備があれば十分であり、建設費、保守費とも少額で済むことは論をまたない。20世紀もあと10数年を残すだけとなって、日本各地で21世紀に向けての構想づくりが進められているが、高度成長時代には、何か

形のある豪壯なものを建設することが賞賛されていたようであるが、今後は、むしろ心のゆとりを育てることが尊重される時代が到来しつつあり、すでにその兆があらわれている。原っぱ公園の実現は、その社会的動向に合致するものであろう。子孫のためにコンクリートの瓦礫を残すのではなく、街の中に広大な緑の原っぱを残して住み良くするということは、いかにも魅力的ではないだろうかと私は考えている。しかも前にふれたように原っぱ公園は、都市の安全性の点からも、非常災害時に広場が有効に利用でき、将来の都市の必要な機能の一環を受け持つことのできる施設でもある。

終りに一言つけ加えたい。前述のグリーンパークの原っぱについて、地元の武藏野市が原っぱの一部をつぶして野球場を作る計画を示した。これ

を聞いた近隣の主婦の方々が中心となって、「原っぱを残そうよ」という運動が展開され、2カ月ほどの間に約5,000人もの賛同の署名が集められて、武藏野市と都の議会に陳情が行われたが、これをくつがえすことはできなかった。これを反省すると、短期間に原っぱに対する多数の賛同が得られた力は相当なものであったが、やはり原っぱを愛する人々は普通は組織化とか、政治力にはなじまないものであって、察するところ、スポーツ団体などの政治力、発言力に抗し得なかつたのではなかろうかと思われる。現在の日本の世相は声の大きい者が勝つ場合が多いが、行政の方向づけは、そなばかりであつては困る。行政は社会の将来の動向をいち早くとり入れて、良識ある計画を立ててほしいものである。願わくば「原っぱ公園」の実現も、その中に加えられることを期待したいものだ。